様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４６０１

研究課題名（和文）ユマニチュードを用いた「対話的保育のための行動指針」の作成

研究課題名（英文）A Principle of the interactive childcare based on the Humanitude

研究代表者
小田倉　泉（Odakura, Izumi）

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０４３１７２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：「対話的保育」は、一人の子どもとの1対1の丁寧で誠実な関係を前提とし、その行動は対話の相手を「人間として尊重する」ことに直結する。ユマニチュードは、ケアを受ける者が「人間として尊重される」ことを実感し続けることができるよう、ケアのプロセスにおいてポジティブなメッセージを言語的、非言語的手段によって伝え続ける。
　本研究では、ユマニチュードを基盤とする「対話的保育」の指針をまとめた。指針に示した基本行動は、ユマニチュードの基本行動であり、保育者の基本行動でもある「見る」「話す」「触れる」とし、更に保育において子どもを尊重する為に重要な「待つ」行動を加え、それぞれの行動の意味、実践の意義を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の出発点は、子どもの最善の利益保障・子ども尊重の実践である。ユマニチュードは、フランス発祥の認知症ケア技法ではあるが、その最も重要な特質はケアを受ける者の人間としての尊厳の尊重であり「人として尊重されている」ことをケア行為を通して伝達することがユマニチュードの技術である。本研究は、ユマニチュードの基本哲学がケアという共通性をもつ保育に適用されることの意義を見出し、保育の場での子ども尊重と保育者の専門性向上に寄与することを目指すものである。また、保育におけるユマニチュード研究としては最初のものであり、保育における子ども尊重の実践に関する教育学、保育学、保育実践学研究にも寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：“Interactive childcare ” presupposes a one-to-one polite and sincere relationship with one child and this childcare means that a nursery/kindergarten teacher respects a child as a human being. For patient can keep realizing that she/he is respected as a human being, Humanitude teaches that the care practitioner keeps communicating positive message to a patient with verbal and non-verbal means during caring and nursing.
This study designed a Principle of the interactive childcare based on Humanitude. Basic behaviors of Humanitude are “gaze”, “talk” and “touch”, and these basic behaviors are also basic and important ways in childcare. Therefore, this principle presents these behaviors and added “wait”. Four behaviors are means to practice “interactive childcare”, and this principle shows meanings and significance of these four behaviors.

研究分野：幼児教育学

キーワード：ユマニチュード　対話的保育　ポジティブな非言語的メッセージ　保育者の行動　「待つ」こと

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

Ⅰ.研究の学術的背景

研究代表者小田倉は、「子どもの権利パイオニア」(M.Gadotti,1998)と評され、国際的認知の高まりつつあるポーランド系ユダヤ人教育者ヤヌシュ・コルチャック(Janusz Korczak,1878-1942)の教育学と教育実践について、国内では日本のコルチャック研究を牽引してきた塚本智宏(東海大学教授)、石川道夫(藤田保健衛生大学教授)両氏、国外では、マリア・グジェゴジェフスカ特別支援教育大学の Wiesław Theiss 教授と Barbara Smolińska-Theiss 教授、また Batia Gilad 女史(国際コルチャック協会会長)、Tsipi Marhaim 女史(イスラエル・コルチャック教育研究所所長,前アヴィハイル・スクール校長)らとの研究交流を重ねながら進めてきた。その中で、コルチャックによる子どもの権利尊重の教育実践の今日的意義と実践の可能性を、コルチャックの教育理念を学校再建の手段としたアヴィハイル・スクール(イスラエル)の実践例をもとに探り、現代の教育・保育現場においてこれを実践するための研修プログラム開発の研究を行うに至っている。この研究から、子どもの権利尊重の実践においては、「権利尊重」という理念から、現状に適したアイデアを抽出し、具体的な行動方針に変換すること、更にそれをシステム化することによって具体的実践に変換していく過程が不可欠であることが明らかとなってきた。とりわけ、子どもの権利尊重、子ども尊重を実践する具体的な行動として、教師の子どもに対する「対話」が極めて有効な方法となっていることが示された。

保育の場における「対話」については、加藤繁美による「対話的保育カリキュラム」の研究(2007、2008, 2009)がまず挙げられ、加藤の提案を引き継いだ塩崎ら(2010)の研究など、対話的保育の意義や有効性を示した研究(森内,2011、淀川,2009、等)がある。しかし、子ども尊重の具体的な行動として、どのように「対話」や「対話的」関わりを実践するかは示されておらず、各保育者の経験やそれぞれの保育観に依拠した、個人的価値観の域を超えていないと言える。

そこで本研究では、子ども尊重の具体的方法として、フランスで考案された包括的ケアメソッドの一つである「ユマニチュード」を基準としながら、その技術を保育の場において応用し、子ども尊重を保育において保障し、それによって保育の質を向上させることを目指すものである。

２．研究の目的

フランス発祥の認知症ケア技法ユマニチュードは、「優しさを伝えるケア技術」とも言われ、ケア対象者の社会的存在としての価値に対する敬意を伝えるケア技術である。ユマニチュードの基本哲学及び基本的技術を保育に適用し、「対話的保育」を実践するための行動指針を作成することが本研究の目的である。この行動指針は、「対話的保育」を実践するための行動様式のモデル、更には保育の質をアセスメントする基準として使用することができる。保育における「ユマニチュード」を基盤とする行動指針作成は、子どもの最善の利益保障、子ども尊重の保育実践、保育者の専門的技術を具体化することを目的とするものである。

３．研究の方法

◇理論的検討

・幼児教育学・保育学における子どもの最善の利益・子ども尊重の保育実践の見地からの「ユマニチュード」理論の検討

・ユマニチュードの３つの基本行動とそのプロセスに関する幼児教育学的見地からの検討

◇行動観察

(1)方法：ビデオ撮影による記録。

(2)撮影対象：保育者の行動
ユマニチュードの基本行動「見る」「話しかける」「触れる」
及び基本行動をつなぐ「待つ」

(3)分析方法：①記録された保育者の行動を子どもとの関わり、発話内容と共に時系列で書き起こし、それぞれの行動の文脈内での意味、継続時間を計測し、ユマニチュードの観点から行動の在りようを分析・考察する。
②保育者の行動における言語的メッセージおよび非言語的メッセージの表現方法の特性を、ユマニチュードの理論と実践方法の観点から分析・考察する。

４．研究成果

「対話的保育」とは、一人の子どもとの１対１の丁寧で誠実な関係を前提とし、対話の相手を「人間として尊重する」ことに直結するものである。ユマニチュードは、ケアを受ける者が「人間として尊重される」ことを実感し続けることができるよう、ケアのプロセスにおいてポジティブなメッセージを言語的、非言語的手段によって伝え続ける。伝達される非言語的メッセージは「平等・正直・信頼・優しさ・尊厳の尊重・慰め・喜び・慈愛」等(本田ら,2014) であり、保育ではこれらに加え「受容・承認・賞賛・寛容・励まし」等を伝達することが重要である。これらを伝達している保育者のポジティブ な行動としては、ユマニチュードの ３つの基本行動の他、

「待つ」や「居る」等 の「静」の行動も含むことができる。

保育においてユマニチュードに基づく行動を実践するためには、子どもとの個別的な関わりが不可欠であり、個別的な関わりにおけるポジティブなメッセージの伝達の繰り返しとその蓄積は、子どもの保育者に対する基本的信頼を形成する重要なプロセスであると言える。また、保育者と子どもとの一対一の関係において子どもが保育者に「待たれる」(鷲田,2006)ことは、「待つ」保育者の信頼を子どもが感じ取ることによって、その子ども自身の存在の支えともなり得る。「待つ」ことは積極的な保育行動には見えないが、存在の支えともなり得る力を有している。

ユマニチュードの特性をもつ行動は、一人対集団、という関係では為し得ず、ポジティブなメッセージを含む一つひとつの行動は、一人の保育者から一人の子どもに対して伝達されてこそ、その行動の意味を発揮する。そしてそこにおいて子どもは保育者の子ども尊重のメッセージを受け取り、尊重に足る人としての価値を保育者によって認められているという実感を得ることができる。

ユマニチュードはケアの行動を「技術」として提示しているが、保育においても保育者の日常的行動の在りようを、専門性を表すものとして捉え、その質の向上が求められる。そこで本研究の最終段階としてユマニチュードを基盤とする「対話的保育」の実践指針をまとめた。指針に示した基本行動は、ユマニチュードの基本行動であり、保育においても保育者の基本行動でもある「見る」「話す」「触れる」とし、加えて保育において子どもを尊重する上で見落とされやすい「待つ」行動について、その行動の意味、実践の意義を示した。

保育者が「対話的」であるためには、その意義とポジティブなメッセージをどのように伝達するかを深く理解することが不可欠である。ユマニチュードに基づく「対話的保育」は、子どもの最善の利益保障に立った保育の質向上に資するものとなり得る。

〈引用文献〉

本田美和子・イヴ・ジネスト・ロゼット・マレスコッティ(2014)『ユマニチュード入門』医学書院.
鷲田清一(2006)『「待つ」ということ』角川学芸出版.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小田倉泉	４．巻 66(2)
２．論文標題 幼児教育実践の原理としての人間学に関する考察 ：「ユマニチュード哲学」を手掛かりに	５．発行年 2017年
３．雑誌名 埼玉大学紀要．教育学部	６．最初と最後の頁 91-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小田倉泉
２．発表標題 保育者の行動の非言語的メッセージに関する研究　―ユマニチュードの観点から―
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 小田倉泉
２．発表標題 保育における「待つ」ことの意味―「ユマニチュード」の観点から―
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小田倉　泉
２．発表標題 保育における「ユマニチュード」の意義に関する研究
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小田倉　泉
２．発表標題 「ユマニチュード」哲学から保育を再考する試み
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考